２００６年1月１日　降誕節第２主日礼拝

『ただ一つだけ』

（申命記６章４～９、ルカ１０章３８～４２）

新しい年を迎え、一年最初の日＝元旦に主日礼拝を守れる恵みを、主に感謝いたします。2006年という年を迎えるにあたり、年間聖句にルカ１０章４２節を選びました。あなたがたは「良い方を選んだ」。そう主イエスにおっしゃっていただける、そんな一年にしたいとの願いからです。

「しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない」（ルカ１０章４２節)。マリアとマルタの物語はとても良く知られています。説教や修養会でもよく取り上げられて、そのためこの話なら良く知っているという気になりがちです。ところがそこに落とし穴があります。この物語、特に主イエスが最後におっしゃった言葉が何なのか？　わかっているようで、案外むずかしいのです。何度も触れているうち手垢がつく、といったらよいでしょうか？　たとえば車の運転でも、慣れた頃によく失敗するといいます。もうわかった、もうできるという慢心が間違いのもとなのでしょう。信仰も同じです。何もマルタとマリアの話に限ったことではありません。信仰とは、祈りとは、救いとは、聖書とは？　わかっているつもり。実はそれが一番あぶなかったりします。そういう気持ちを捨てて、もう一度新しく聖書に聞いてみることは有益です。今年このみ言葉を年間聖句に掲げたのは、主イエスのみ言葉によって、わたしたちの信仰が新たにされる。そういう経験をご一緒にしていきたいと願うからです。み言葉の洗礼を受け、信仰の古い垢を落としていただき、新しい歩みを始めましょう。ルカ１０章４２節のみ言葉に深く聞いていくことは、その意味できっとよい訓練となるに違いありません。

さっそく、御言葉に聞いていきましょう。38節：主イエスと弟子たち「一行が歩いていくうち、イエスはある村にお入りになった」。まず注目すべきは、弟子たちを連れて主イエスは、伝道旅行の途中、マルタとマリアのいる村に立ち寄られたことです。同じ例は他にもたくさんあります。有名なのは、ザアカイの家に立ち寄られたとき。あのときも主イエスは、エルサレムを目指して旅の途中でした（ルカ 19 章)。都に入って、神の国を宣べ伝え、十字架につくために、主イエスはエルサレムへの道を急いでおられました。しかしその途中、あえて道をそれて、いくつかの村や町を訪れた。そして特定のある人の家に入っていかれました。それは、「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから」と救いを宣言するため。「人の子は、失われたものを捜して救うために来た」からです（ルカ 19 章 9～10)。　そのために主イエスは、マリアとマルタのところにもやってこられました。二人が暮らすこの村に主イエスがやって来らた時、主イエスを最初に家に迎え入れたのはマルタでした。主イエスがどなたであるか、知っていたからでしょう。主イエスに対する彼女の信仰のほどが、うかがわれます。さてマルタには、マリアという名の

姉妹がいて、この人もまた主イエスを信じていました。マリアは主イエスが家に入るや、その足もとに座り込み、主イエスの話にじっと聞き入っていました。ちなみにヨハネ福音書でも、この姉妹が出てきます（ヨハネ 11 章)。そこでも主イエスを出迎えるのはもっぱらマルタで、マリアの方は家の中にじっと座ったまま主イエスを迎えています。

主イエスが語る言葉にじっと聞きいるマリア。これに対しマルタは「いろいろなもてなしのために（独り）せわしなく立ち働いていた」(ルカ 10 章 40)。ここから二人の性格の違いを読み取る人もいます。しかし単に性格の違いで片づけるのは、あまり聖書に忠実とはいえません。なぜなら 40 節は、原文をみるとこう書いてあるからです。「しかしマルタの方はといえば、何かに心を引っ張られて、ふり回されていた」。あるいは「心を（主イエスから）引き離されて、そのため乱暴に扱われていた」。つまりマルタは今、信仰の瀬戸際に立っている。生きるか死ぬか、永遠の命が危険にされされている。主イエスの目には、そう映っていました。

もちろんマルタの方は、大まじめです。イエス様が我が家に来てくださったから、一生懸命もてなそうとしました。おそらく食事の準備だろうといわれます。決していい加減な気持ちでもないし、自分のために立ち働いていたわけでもありません。大切なお客さまをもてなすため、イエス様のためにしていることです。そのことは、イエス様もよくわかっておられました。ですから最後まで主イエスは、マルタを叱ったり、冷たく裁いたりしてはおられません。イエス様がここで問うておられるのは、マルタの心の向き、心の向いている方向でした。　確かにマルタは、イエス様の「ために」一生懸命働いています。そのつもりでした。しかし、イエス様の「ために」とはじめたことが、いつのまにか御心からそれていく。よくあることです。神様のため、教会のため、いつもそういって、人は何かをはじめるのです。けれども、それがいつも必ず、すべて、神のご意思にかなっているとは限りません。いつも主に聞いていないと、われわれはすぐ道からそれて、迷います。何が主の御心かわからなくなるものです。教会の歴史には、そういう残念な事例や悲劇が、いつの時代にも必ずありました。だから、どんなときにもまず、「主イエスに聴く」。このことを第一にするべきだと主イエスは言われたのです。

「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している」(41 節)。このお言葉は、原文どおりだとこうなります。「マルタ、マルタ、あなたはたくさんのことに心を用いすぎて、混乱している」。あなたは背負いきれない重荷を、自分一人で背負おうとしている。そのため混乱状態、パニックに陥っている。それはいつもの、本当のあなたではない。そう主イエスはおっしゃっているのです。これは 40 節にでてくるマルタの様子にも通じます。40 節は原文どおりではこうでした。「しかしマルタの方はといえば、何かに心を引っ張られて、ふり回されていた」。あるいは「心を（主イエスから）引き離されて、そのため乱暴に扱われていた」。これが、主イエスの目に映っていたマルタです。イエス様のために、自分一人で一生懸命、食事の世話や弟子たちのもてなしのために、悪戦苦闘しているマルタ。しかし、主イエスの目に映っていたのは、喜んでそうしているマルタではない。

日常の様々な思い煩いに取り憑かれて、心をバラバラに散らされている。正気を失っているマルタ。そのため、せっかく来てくださったメシア、イエス・キリストから、どんどん引き離されてしまっている。「イエス様のために」と働けば働くほど、実際は救い遠ざかっていくマルタ。これ以上の悲劇があるでしょうか？　わたしたちも同じです。どんな信仰者も、救い主から引き離されるようなことがほんの片時でもあったら、ひとたまりもありません。悪魔の罠にかかって、ひどい目に遭うほかない。救い主と同じ家にいながら、魂は主から遠く引き離されて、地獄の滅びに逆戻りしかけている。永遠の命が危険にさらされている。ならば、どうしてこのまま放っておけるだろう。何としても救い出す。滅びから、信仰の瀬戸際からこの娘を救い出す。そのために主イエスは、この家に来たのだから。

　そのため主イエスがなさったのは、以外にも、待つことでした。主イエスは待っていました。マルタが自分から口を開くのを！　口を開いてご自分に助けを求めてくるのを。今か今かと主イエスは待っておられました。なぜなら、「主を求める。主イエスに聴く」、これこそが無くてはならないたった一つのことだから。これ以外に救いの道はないからです。

　主イエスが待っていると、遂にマルタの口から、叫び声が上がりました。「主よ、わたしの姉妹（あのマルタ！）は、わたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるように言ってください」（40 節）。わたしだけ、わたしにだけこんな思いをさせるなんてイエス様ひどい！　マルタはそう言ったのです。

　イエス様に向かって、ずいぶんな物言いだと思います。けれども正直な話、これがわたしたちの本音なのではないでしょうか。そもそもこの話を読んで、皆さん、釈然としないものを感じませんか？　なぜマルタだけが叱られるのか？　主イエスはなぜ、マルタの願いを聞いて、座っているだけのマリアに何も言ってやらないのか？　　正直なところ、不可解です。実に多くのクリスチャンが、ここでのイエス様に違和感や疑問、いえ理不尽さすら覚えているのではないでしょうか？　なぜマルタだけにあんなことをイエス様はおっしゃるのか？　えこひいきではないか？　少しでも、そういう思いが頭をもたげてきたなら、それを隠さず、正直に聞いてみるべきです。主イエスご自身に！　なぜなら、われわれが感じるその思いはみな、マルタの心の中にあるものとまったく同じだからです。なぜわたしだけなのですか？　なぜわたしだけ、こんな目に？　人生のあらゆる場面で、誰しも、そういう問いを抱いたことがあるでしょう。この問い、わたしたちの叫びを、正直にぶつけるなら、主イエスは必ず答えてくださいます。主イエスは求める者をむなしくさらせることはありません。主イエスに求め、主イエスに聴きましょう。そうすれば必ず、神に出逢えます。キリストに結ばれ、主のものとされる。喜びの体験が、わたしたちを待っています。「主イエスに聴く」とはそういうことです。これこそがわたしたちにとって最も大切なこと、ただ一つのことなのです。

　魂の叫びに対する神の答え、それは主イエスの言葉の中に、すでに示されています。は

げしく食ってかかるマルタに、主イエスは答えます。「マルタよマルタ、あなたは多くのことに振り回されて、わたしを見失っている。でも本当に必要なことはただ一つだけだ」。それは、あなたもわかっているはずだ。マルタの気を鎮めるように、主は語りかけます。そして最後に言われました。「マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない」。なぜならマルタ、あなた自身のためだから。あなたは今、最も大切なこと、永遠の命に至る、最も大切なことを見失おうとしている」。わたしに聞くことだ。これをもう一度、取り戻しなさい。そうすればあなたもマリアも生きる。そう言われたのです。

　マルタの訴え、あの最後の一言は、原文で読むと非常に意味深いです。普通は、「(マリアに）手伝うように（イエス様あなたが）おっしゃってください」と読みます。日本語の聖書も皆そうなっています。しかし、こうも読めるのです。「わたしの味方となるよう言ってください」。英語で、そう訳している学者がいます。「わたしには味方がいない」。一人きりで、きりきりまいで、やりきれない。神もキリストもあったものか！　そうなりやすいわたしたちに味方がいます。本当の味方、それはイエス・キリストです。

　信仰が崖っぷちまで追いやられたマルタに、主イエスが助けの手を差し伸べられました。いろいろな事に心を奪われ、神様から、キリストから離れていきそうになるマルタ。弱いマルタを、主イエスはいつも守り助けて下さいました。同じ様に弱いわたしたちを、主イエスはいつでも守り導いておられます。ですから、自分独り、孤独に耐えて信仰生活を送っている。そういうときこそ、主イエスに心を向けてください。主イエスを求め、主イエスに聴いてください。この御方こそ、十字架にかかるための道を急ぎながら、その途上で、あえてわたしたち一人一人を訪れてくださる方です。心を開いて、この方をお迎えするなら、「今日この家に救いが来た」と宣言してくださる救い主です。だから心で信じ、口を開いて告白しましょう。主イエスの名を呼び求めましょう。うれい、悩み、くるしみ、疑い。それらすべてを主に打ち明け祈りましょう。そのとき、主が親しく臨んでくださり、神の平和がわたしたちを誘惑から守ってくださいます。こうしてわたしたちは、主が与えたもう平和、動かざる平和の中を、確実に歩んでいくのなるのです。祈ります。

[説教者：堀地正弘牧師]